

1.8, 1.4 hr で, DKB は十分な PAE を, CMNX は β -lactam 剤中では多少長い PAE を, FOM も PAE を示すことが推定された。

4) 当科における細菌性眼内炎の統計的観察

宮尾 益也・田沢 博 (新潟大学)
 坂上富士男・本山まり子 (眼科)
 大桃 明子・大石 正夫

1984年から1988年までの5年間に当科を受診した23例の細菌性眼内炎について検討した。

発症動機は穿孔性外傷9例(うち異物を認めるもの5例), 術後早期感染5例, 術後晩期感染6例, 内因性感感染3例であった。起炎菌は眼内または血液から分離されたものを確実例として菌検出率は56.5%であった。内訳は *S. epidermidis* 2株, *S. aureus* 1株, *P. aeruginosa* 2株, *S. marcescens* 2株, *K. pneumoniae* 2株, 非発酵菌1株, 嫌気性 GPR 2株, *Propionibacterium* 1株であった。治療は各種抗生剤の全身・局所投与とともに, 硝子体切除術が7例, 前房洗浄6例に施行された。抗生剤の眼内注入はそれらと組み合わせ7例で行われた。視力予後は不良で, 14例と半数以上で最終視力が指数弁以下であった。

5) 難治性眼感染症に対する化学療法剤とポリグロビンの併用効果

本山まり子・坂上富士男 (新潟大学)
 田沢 博・大桃 明子 (眼科)
 宮尾 益也・大石 正夫
 今井 晃 (水原郷病院眼科)

方法: 化学療法に抵抗した眼感染症に, 還元アルキル化免疫グロブリン 50mg/ml を含む静注用製剤であるポリグロビンを併用した。ポリグロビンは1日1回, 2500mg/50ml, 1A を約30分で点滴し, 症例により増量又は1日2回, 3日間連続投与した。各症例ともに原因疾患に対する治療も同時に行った。

結果: 症例は17例16眼である。ヘルペス性感染症への有効度は著効が7例, 有効4例, やや有効3例, 78.6%が著効ないし有効であった。角膜真菌症の2例に対しては, 抗真菌剤の点眼, 点滴に併用してやや有効1例, 不明1例であった。原因菌不明の1例は効果不明であり予後不良であった。

ポリグロビンによる副作用として特記すべきものはなかった。

結論: 化学療法に抵抗性の, 難治性角膜感染症にポリグロビンを併用投与し, 著効ないし有効は64.5%, やや有効23.5%, 不明12%であった。

6) 当科の慢性中耳炎より検出される *S. aureus* の薬剤耐性

—MRSA を中心にして—

田中 久夫 (中央総合病院耳鼻咽喉科)
 富山 道夫・中野 雄一 (新潟大学耳鼻咽喉科学)
 今井 昭雄 (新潟市民病院耳鼻咽喉科)

1977年から1988年までの11年間に新潟大学耳鼻咽喉科を受診した真珠腫性中耳炎を含めた慢性中耳炎で, 細菌学的検査にて検出した *S. aureus* を対象とした。年次別に, 検出菌中の *S. aureus* の割合, *S. aureus* の薬剤耐性パターン, 特に MRSA については MINO, ビリドンカルボン酸系抗菌剤などの耐性率や CEZ, CMZ, AMPC/CVA の MIC よりその耐性機構を考察した。入院, 外来での検出率を比較し hospital infection の意味づけも検討した。

7) 胆嚢炎の発症因子について

清水 武昭 (信楽園病院外科)
 青木 信樹・村山 久夫 (同内科)
 関根 理

胆嚢炎をエコーで確定診断し, 重症胆嚢炎症例を穿刺し, 採取した胆嚢穿刺液を検索した。検討症例は15例で, 無石胆嚢炎が2例, 胆嚢結石のみの症例が8例, 胆嚢結石総胆管結石の認められた症例が5例であった。コントロールはほぼ無菌であったが, 胆嚢炎全体では 10^4 個/ml であった。総胆管結石の無い症例では, 10例中7例が無菌で, 総胆管結石のある群では5例とも 10^6 個/ml 以上であった。コントロールと胆嚢炎全体を比較すると1%以下の危険率で有意の差があり, 総胆汁酸濃度は低くなっていた。胆汁うっ滞の所見を示した。Free の胆汁酸は胆嚢炎全体はコントロール群に比し1%以下の危険率で高く, 胆嚢炎群を総胆管結石無し群と有り群で分けると, 総胆管結石無し群はコントロールと変わりなく総胆管結石の無い胆嚢炎は細菌感染ではない可能性を強く示唆していた。